慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	加藤寛編 公企業の経済学
Sub Title	
Author	鈴木,守
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.2 (1967. 2) ,p.246(118)- 248(120)
JaLC DOI	10.14991/001.19670201-0119
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670201-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とになった。沿岸 こんで、沿岸の農民に甚大な被害を与えるこれる鉱毒の量も増し、それが渡良瀬川に流れ次第に事業を拡張するようになると、放出さ

解決のために身命を賭して行動したのが田中間題ともいわれるものであるが、この事件のまで、およそ四〇年間にわたって世間の耳目まで、およそ四〇年間にわたって世間の耳目との事件は、明治一〇年代に始まり、鉱毒 正造であった。

は 名主の (改進党) 自由民権運動に身を投じ、後半生は鉱毒問 家に生れ、 ίţ として活躍するが、 栃木県の小中村(現在佐野市) のちに県会議員、国会議員 その間、前半 の

かわるものが蒐集されたが、田中と親交のあ対し抗争しつづけた特異な人物であった。対し抗争しつがけた特異な人物であった。対し抗争しつづけた特異な人物であった。対し抗争しつづけた特異な人物であった。 は書くに及ばない。翁の雄弁と其の妙文との ものである。 の資料を使って彼の生涯をつづろうとした た木下尚江 その理由は「翁の伝記」 国会での演説や質問、それに若 の整理・編集により、 そのうち - 其れ

たしかに、上とからであった

民と起居を共にしたり、どの時代 に あっ て晩年には渡良瀬川沿岸を追われゆく谷中村農つきて明治天皇に直訴を試みたり、さらに最がり分を辞退したり、また鉱毒問題では万策 そ、 うるものといってよいであろう。 だけに本書のような田中自身が遺した記録こ きだしにして闘い続けたものであった。それ げに反対してそれが可決されれば自らは値上 概が脈打っていることに気づく。事実、彼のせぬ強い信念に裏付けられた精神主義的な気も、その中に彼の一轍の気性、何ものにも屈書簡、演説、あるいは和歌のどれ を とって 生涯は、若くして横暴な権力に抗して一度な概が脈打っていることに気づく。事実、彼の らず投獄されたり、 生きと伝えるものであり、 彼の足跡を飾りけなくありのままに伝え 欠点をさらけだしながらも反骨精神をむ起居を共にしたり、どの時代 に あっ て 本書は田中の苦闘の生涯を生き 国会では議員の歳費値上 収録された日記、

なぜか日記にも、 った幸徳秋水にか もか (直訴文の起草を依頼し、 ts **毒事件のことにしても、夥しい資料の存在に** しかし、 か わらず、 田中自身のことにしても、 して ている)や鉱毒教済運動の実、、書簡にもそれについてふれかかわる事件でありながら、 田中の大逆事件に対する所見 なお解明さるべき点も少なく その後も親交の また鉱 ぁ

> ろである。

一九六六年四月刊・A5・七七七頁・三〇〇 ろ大であると いえよう。 中や鉱毒事件のみならず、ひろく戦前 復刻されたことは(解説・年譜・ ともあれ、 社会運動の研究のために寄与すると 、 高価で入手しがたかった本書が (文化資料調査会・ 小松隆二 の社

加藤寛編

『公企業の経済学』

業に、さまざまな角度からスポットを当てた始まる本書は、新しい政策手段としての公企のすべてを物語っている。」という書き出しでないこの標題が、われわれの共同研究の目的「『公企業の経済学』というまことに耳慣れ 『公企業の経済学』

まする対抗力としての公企業の役割が強調さいする対抗力としての公企業の役割が強調と対する対抗力としての公企業が果しうる役割が述べられ、第四章では、資本の自由化に関が述べられ、第四章では、資本の自由化に づいてその効率性をチェックしなが用逓減産業についても、有効競争型道が十分考えられるであろうし、同たがって公企業をつうじて公共財 業に供給を委ねるのが望ましい、 いてその効率性をチェックしながら、 って公企業をつうじて公共財を供給する 有効競争理論にもと とされる。 同様に、 公企 費

ば、企業生とく…による公有であり、経営原則につ、これ、所有形態からみれば政府の出資、持株等は、所有形態からみれば政府の出資、持株等は、所有形態からみれば政府の出対して、前者

いる。

すなわち、

後者が、

utilities)とは異なる概念として用いられて

企業であって、

いわゆる公益企業(public

するための手段としての企業がここで

いう公

経済において、政府が特定の政策目標を達成企業」の定義が述べられる。すなわら、混合

注目すべき著作である。

まず序章で、

本書の題名となっている

公公

政策、投資政策、資金調達問題の分析にあてられる。まず第五章で、供給設備が分割不可能な自然独占的な公企業の価格決定原則について、平均コスト原則と限界コスト原則の長短が比較検討される。結論としては、パレート最適の理論の教えるところにより、限界原則にもとづくことが望ましく、その際生ずる損失についても、複数価格制度、差別価格制度などによって、できるだけ企業内で処理すべきことが主張されるが、理論的にも政策的にも興味深いところである。この問題と関連にも興味深いところである。この問題と関連して、第七章で、外部資金に依存するところ がめられていることが指摘される。る補償や補助が不十分で、経営の自主の大きい国鉄について、その公的負担 第二部は、 このような公企業における価格 に対す

ては疑問を投げかけている。最近の中郵事件というだけでスト権を全面的に禁止することというだけでスト権を全面的に禁止することをませと、そこで働くう [2] 解とい 勧告の実施である。)など、 ついてはほぼ完全実施の慣行が生 ま れて おば紛争がみられること(ただし、国鉄などに り、問題はむしろ公務員給与に対する人事院 か 問題に逢着するが、それについては、いくつ の公共性をいかに調和させるかという困難な 制や監督と関連して、 の一般的な原則が指摘されるにとどまって 公企業の社会的側面を扱うのが第三部で そこでは、 そこで働く労働者の利益を調和させ(施である。) など、 公企業のもつ公 まず、 公企業に対する政府の統語面を扱うのが第三部であ 経営の自主性と公企業

作である。日本経済研究センターにおける共企業の問題にはじめて多角的に取り組んだ労以上の紹介からもわかるように、本著は公

介

らに対する資源の配分が過少になること、し紹介され、競争市場にまかせたのでは、それうることが示唆される。次に公共財の理論が

には、公企業がその規制に大きな役割を果しに生産者から消費者に外部効果が生ずる場合あげられる。とりわけ生産者相互間、ならびて、まず外部経済・不経済が存在する場合が

政策的な分析である。その典型的な事例としパレート最適が満たされない場合の理論的、

第二章を含む第一部の中心的な課題は、

<u>こ</u>の 次の

最適の理論が紹介される。

しかし、

て

な目標であるが、

、有効な経済組織の評価基準の問題と、パレな目標であるが、第一章ではそれに関連しいつの場合でも経済効率は経済政策の基本

うことになる。

九 \Box

同研究の成果とのことであるが、編著にありば、公企業を政策手段として活用しようならば、公企業を政策手段として活用しようとすればするほど企業としての自主性が損なわれるという問題、公企業の定義からして当然重きをなす政府の財政資金の投資効率をどう評価するかといった問題について、さらに進んだ検討を期待したいと思う。(日本経済新聞社・昭和四一年九月刊・A5・川三三頁・一〇〇〇円)

一鈴 木 守

天野明弘著

『貿易と成長の理論』

でもある。この本のでき上った事情がこのよりに、すぐれた労作であり、かつエレガントに、対な関連は、興味ある傾向が見られる。高山及氏の『国際経済学』(東洋経済)、根岸隆氏の『個格と配分の理論』(東洋経済)、根岸隆氏の氏の『国際経済学』(東洋経済)及び本書などからその傾向をうかがうことができる。これらの著書はいずれも、著者が内外の経済専門の雑誌に発表した諸論文や、留学した大学に於ける博士論文等から成っており、世界の氏の『国際経済学』(東洋経済)及び本書などからをの質問を表す。

者のために多大の便宜を与えてくれる。る。十分に整理された参考文献表もあり、読め傾向を知るうえにも十分に役立つものであい傾向を知るうえにも十分に役立つものであら、また貿易論の世界の傾向を知るうえにも十分に役立つものである。十分に整理された参考するというなため、初級者にとっては幾分困難を感ず

れ、貿易論を理論的に基礎づけ、二部門モデかであろうが、最新の議論を十分 に と り 入かであろうが、最新の議論を十分 に と り 入ルを用い、今までの主張の整理、一般化を行れ進歩の問題で、ここでの特長は二部門モデ ェスター大学での博士論文から成っている。野氏が過去七年間に発表された論文や、ロチ本書はその序で述べられているように、天者のために多大の便宜を与えてくれる。十分に整理された参考文献表もあり、読 ルの比較静学的アプロ な窮乏化成長の理論も含まれる。 第四部は技 念を含む、 済発展と交易条件の関係を扱う。 第一部で二部門モデルを比較静学 的に 利 用れている。構成は大別すると四部から成る。 要因を重視した二部門モデルが十分に応用さ摂取したいということで、そのため生産側の氏の意図は貿易論にできる限り生産の理論を 効果を分析する。 第三部はヒックスによって提起された経 貿易均衡の安定性、関税及び要素移動の 最適関税、最適海外投資等の問題 第二部で"最適"という概 ここに有名 ロチ 天

—川島康男